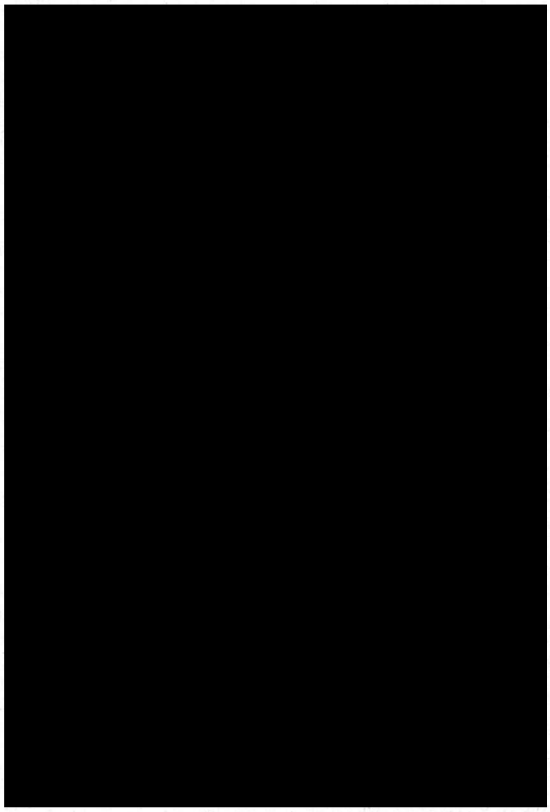

山澤逸平

『日本の経済発展と国際分業』

東洋経済新報社　1984.4　266ページ

本書の概要

本書の内容は書名どおりである。著者自身の言葉をまえがきから引用すれば，「貿易と成長の相互関連〔の研究は多数あるが，そ〕のメカニズムの究明にはなお詰めるべき余地が多い。本書は筆者が過去10年間にわたって発表したこの課題に関する研究成果を集成したものである」。

日本のという修飾語から知られるとおり，本書はすぐれて実証的であり，数字と制度にかんするデータがきわめて豊富にもり込まれている。データから遊離した抽象思弁は皆無であるといってよいが，しかし本書の貢献はデータの提供にあるのではなく，数量データは著者と山本有造氏の『貿易と国際収支』を基礎にしている。したがってその評価にさいしても，データの発掘でなく，データからいかなる「事実発見」がなされ，貿易と成長のメカニズムがいかに解明されたかが問われることになる。

著者が導き出した命題は数多いが，その「中核の分析枠組みには雁行形態論を用い」，「日本の工業化過程では諸々の近代的産業が継起的に導入され，輸入代替化，ついで輸出化してい」(傍点は評者)ったことを確認する。また商社活動と貿易の拡大についてユニークな分析を試み，日本の通商政策・産業政策を概観したのち，日本モデルの発展途上国への適用という魅力的なトピックに及ぶのである。

本文は4部10章で230ページ。図・表・注が豊富で，多数の文献とくわしい索引があり，コンパクトな統計集も付属しているという，当然とはいえきわめて良心的に準備された学術書である。

各章の内容

各章の内容は序論で6ページ分に簡潔に要約されているのでここで再要約することはしないが，項目だけは記しておこう。第1部は日本の経済発展と国際分業と題した，いわばイントロダクション的な部分で2章からなる。第1章は基礎的な統計が表と図で提示され，第2章はマクロのデータを用いた「日本モデル」のメカニズムの説明である。前者は私には非常に有益であった。後者については後にコメントしたい。

第2部は産業発展と外国貿易と題して4つの章をもち，本書の中心部分である。各章は生糸，綿業，鋼鉄，商社のケーススタディであって，繊維と鉄鉱は雁行形態論の実証にもなっている。商社活動と貿易拡大の関係を分析した第6章は，私にはもっともオリジナリティにとんだ研究と思われたが，その内容についてはのちにコメントするつもりである。

第3部は経済発展と産業・通商政策と題して，第2次大戦前の通商政策(保護政策)の概観，戦後の高度成長期の通商政策，および貿易摩擦を扱った3つの章からなる。いずれも有用な情報をふくむが，戦後を扱った2つの章は私はやや密度が薄いのではないかとの印象をもった。ことによると，第2次大戦前について私の予備知識が皆無に近く，それだけ強い印象を受けたのかもしれないが。

最後の第4部は，比較的短い1章のみで，日本モデルを発展途上国に通用する可能性を説いており，雁行形態と商社をとくに取りあげている。

以上の項目の列記からも分るように，本書がカバーするトピックはかなり多岐にわたり，私の能力不足もあって(正直のところ自分が書評の適任者とはとても思えない)全体を論評することはできない。以下では雁行形態

論と，貿易拡大にたいする商社活動の役割に焦点をしぼって，コメントを記してみる。

雁行形態論

雁行形態論は(私の理解が正しければ)経済発展と貿易にかんする1つのグランド・セオリーで，コンドラチェフ波動や国際収支段階説に対比できようか。著者はこれがプロダクト・サイクル論と異なると述べており(p. 76)，主たる根拠は前者が要素賦存や要素相対価格の変化によって，ある産業全体が移転する長期過程を分析する」ところにあるという。そのようなものとしての雁行形態論が十分に実証されたであろうか。

生糸，綿業，鉄鋼のケース・スタディはそれ自体として丹念なもので，研究論文としての貢献は大きいと考える。しかし生糸の動向は雁行形態のモデルからはかなり乖離している。綿業(一般に繊維)と鉄鋼はこのモデルの典型であろうが，それでも私には論じ残された点がいくつかあると思われる。

雁行形態の基本型は p. 74 に示されているが，それと比較すると繊維と鉄鋼はともに初期の対内直接投資を欠いているのはなぜか。また鉄鋼はいまだに輸入増加段階に達していないのはなぜか。ちなみに著者の日本工業にかんする基本的認識は，「自給度の高い工業生産体制を作り出し」たというものであり，そうなら，雁行形態論の輸入段階に達した繊維は例外ということにならないか。

他方，第2章では総輸出入，交易条件などのマクロ指標を用いた分析，あるいは工業品と素原料などごく大まかな産業分類による分析が行われている。私はこのようなマクロ指標では雁行形態論はテストできないのではないかと考える。雁行形態とは「諸々の近代的産業が継起的に導入され，輸入代替化，ついで輸出化していく」過程だからである。第2章の目的は必ずしも雁行形態論のテストでないかもしれぬが，ともかくこれはたとえばヴァネックが米国について行った比較優位構造の変化の分析と大きく異なるものではない。雁行形態論は第2章とは異なった手法で，オーバーオールにテストされる必要があるのではないか。(国際収支段階説についてはこのような試みが2,3ある。)

第3に，雁行形態と政府の介入の関係が私には十分明らかでない。たしかに関連部分ではかなり詳しい言及があり，綿業では政府の産業育成の役割は小さかったが，鉄鋼(および他の重化学工業)ではその役割は大きかったことは分る。また著者は何回か輸入代替過程における競争圧力(コスト低下努力の重要性)を指摘している。実際，雁行形態論の「基本的な関係」は生産増加にともなう価格低下なのである。

しからば雁行形態論にとって政府の役割は基本的に重要なのかそうでないのか。綿業と鉄鋼の2つのケース・スタディからはむろん結論は出てこない。また初期に幼稚産業保護が必要としても，どのていどの，いかなる手段による保護が望ましいかも，ケース・スタディからは導けない。しかし日本モデルを途上国に適用するには，この問題はかなり重要なはずであって，やはり日本経済にかんするオーバー・オールな分析をとおして何らかの結論を出すのが望ましいのではないか。

貿易拡大と商社活動

第6章は「明治期における日本商社による外商の代替過程，1910～30年代の総合商社の出現，戦後における総合商社の一層の展開過程の分析」をとおして，日本の商社が「速やかな雁行形態的発展を可能にした制度的工夫」であったことを示そうとする。そのうち1910年以降については分量もすくなく，分析というよりは記述であるが，明治初期の分析はきわめてユニークである。

ここでは「直貿易の拡大，つまり日本の外国貿易で内商が外商にとって代っていくことが，貿易の商品別・地域別構造の急激な変化と密接に結びついていた」という仮説を，1884～1900年についてテストする(データはこの期間についてのみ存在するとのことである)。そうして上の仮説がテストされ，具体的には当初は外商より内商のほうが取引拡大意欲が強かった，したがって，直輸率(内商が扱う輸出入割合)が高い商品の貿易の伸びが高かったとの命題を導き出す。

私は(文献の知識はきわめて乏しいが)このように内商の役割をデータでテストした研究を知らない。また直輸率が高まると貿易が拡大するとの見方も，かなりユニークではないかと考える。その意味で本章はもっとも独創的であり，データの分析も丹念であって，興味深い研究成果をなしている。しかし結論にかんしては私は2つの疑念をもつ。

1つは回帰分析で得られた結果が，内商と外商の区別ではなく，それまで独占的であった外商の商社活動にたいして，内商が競争の要因を導入したためではないかとの疑念である。私は結果を丹念に分析したわけではないから，これは文字どおり疑念であって，対立仮説というほどのものではない。しかし著者は他の章では競争の重要性をしばしば指摘しているだけに，本章にも競争と独占の視点が加わって欲しかった。

第2は貿易は相手があるので，内商・外商の区別は意味をもつかとの疑念である。もっとも極端な場合に2国

モデルで考えるなら，商社がどちらの国に属していようと，両国の貿易の伸びは定義によって同一である。それとも著者のヴィジョンは，多数国モデルのとき直輸比の高い国の貿易は平均以上に伸びるということなのであろうか。もしそうなら，現代のアジア NICS の分析をとおして，国際比較で直輸比と貿易の伸びの関係を確めることもできよう。私は直輸比と貿易の伸びのあいだには，あまり密接な関係がないのではないかと想像する。たとえば本書でも，韓国の輸出増加では外商の役割が大きかったとしている(p. 223)。

このように本書の主要部分の結論は私には controversial と思われるが，それは本書がモノ真似でなく独創的な研究を志していることの反映である。この方向での一層の研究を期待したい。　〔**新開陽一**〕

[redacted]

[redacted]